

教師の指導文化尺度作成の試み —信頼性・妥当性の検討—

○ 井原啓裕 (大阪教育大学大学院)

牧 郁子 (大阪教育大学)

問題と目的

大阪府の教員の年齢構成は 20 代、50 代が多く 35 歳から 45 歳までが極端に少ないダンベル型をしており (大阪府教育委員会, 2010)、今後熟練者が減少し新規採用が増加することが予想される。さらに「公よりも私を重視する」プライベート化の浸透 (油布, 1999) と、年齢構成の偏りによって、現在学校現場での協働性が十分機能していないことが示唆されている (堀, 2012; 吉田, 2012)。こうしたことから、学校や熟練者が今まで蓄積してきた指導に関する実践や経験、つまり教師の指導文化を今後次世代の教員へ継承してゆくための方略を検討する必要があると考える。しかし教師の指導文化を測定し、その状況を検討するための尺度が殆どないのが現状である。そこで本研究では、教師文化によって継承されると考えられる暗黙知をふくみ、かつ比較的広く共有されていると考えられる指導文化を測定する尺度を作成し、因子論的妥当性・内的整合性・構成概念妥当性を検討することを目的とする。

方 法

<予備調査>

【被調査者】大阪府内で教職員経験 10 年以上の教職員 22 名 (平均年齢=46.9 歳, 平均教職経験年数=22.9 年) に、尺度原項目作成のため、調査を実施し回答を得た。

【手続き】教師の指導文化の操作的定義に基づき作成した 9 項目について自由記述式で調査を行った。得られた回答内容を、中学校教員歴 17 年の指導主事と、小中学校のスクールカウンセラー歴 13 年の臨床心理士とで、KJ 法により分類し計 50 項目の尺度原項目を選定した。

<本調査>

【被調査者】大阪府内 3 市の教職員 264 名 (小学校 10 校・131 名, 中学校 9 校・133 名, 平均年齢=41.5 歳, 平均教職経験年数=16.8 年) に調査を実施し回答を得た。

【手続き】「あなたが所属する学校における子どもへの指導, 教師間・教師保護者間の関係性について、最もあてはまると思う数字に○をつけてください」と教示し、計 50 項目の教師の指導文化尺度原項目に関して、「あてはまらない: 1」～「あてはまる: 4」の 4 件法で回答を求めた。また、平行調査として教師における協働性尺度 (牧ら, 2010)、職業ストレス簡易調査票におけるストレス反応尺度 (下光ら, 1998) を併せて実施した。

結 果

主因子法プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷が .40 以下であった計 22 項目を除外した結果、解釈可能な 3 因子が抽出された (Table 1)。因子 1 は「教師として必要な基本的態度・姿勢」、因子 2 は「横の関わりを重視した学級経営」、因子 3 は「子どもの主体性を引き出す授業実践と指導」と命名した。なお合計得点

の α 係数は .96、因子 1 が .90、因子 2 が .90、因子 3 が .91 であり、十分な内的整合性が確認された。また尺度の構成概念妥当性を検討するため、作成した教師の指導文化尺度総合得点と、教師における協働性尺度、職業ストレス簡易調査票におけるストレス反応尺度総合得点との間で、ピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、教師における協働性尺度と有意な中程度の正の相関 ($r=.47, p<.01$) が、職業ストレス簡易調査票におけるストレス反応尺度とは有意な弱い負の相関 ($r=-.32, p<.01$) が認められ、構成概念妥当性が検証された。

Table1 教師の指導文化尺度因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	共通性
13 自己判断で行動せず、学年で情報共有・交換した上で、行動する	.82	-.13	-.05	.49
47 子どもについての情報を他の教師から得る	.79	-.02	-.06	.54
46 教師間の情報共有を図り、指導の方向性を共通理解する	.73	.10	-.09	.56
12 子どもと約束したことは必ず守る	.58	-.17	.21	.38
38 管理職の大局的観点を参考に、現場としてできることを建設的に話し合う	.54	.16	-.03	.43
26 問題が発生したら、早期対応・解決を目指す	.54	.09	.06	.43
15 子どもの良いことはその場ですくねにほめる	.52	-.03	.20	.42
21 管理職の方針を受けとめ、必要な準備・提案を行う	.51	.10	.06	.40
45 管理職に状況把握してもらっているために、日頃から報告・連絡・相談を行う	.48	.23	.04	.48
35 子どもはいつも自分を見ているという意識をもって自ら模範を示している	.48	.18	.05	.44
8 どんな親でも子どもの前では否定しない	.45	-.13	.09	.18
48 思いは思いで受けとめ、事実関係は事実関係で客観的に判断する	.43	.24	.07	.47
30 学級全体で1つの目標に取り組み、一体感を持たせる	-.21	.93	-.04	.59
41 要支援の子どもへの周囲の理解・援助を引出し、学級に居場所を作る	-.15	.90	.02	.65
31 要支援の子どもを特別扱いせず、1人1人が認められていると感じる学級づくりを行う	.13	.66	-.12	.46
17 一人一人の居場所がある学級づくりを行う	.09	.65	.11	.64
39 授業における子ども同士の活動を通じて、規範意識・仲間意識を高める	.07	.61	.13	.59
37 子ども同士が違いや良さを認め合える環境づくり	.11	.59	.11	.58
40 子どもの会話や関わりを機会を日常的に絶やさない	.25	.59	-.15	.47
7 子どもの理解・興味関心を引出す教材の作成	-.06	-.24	.99	.64
6 授業を実践するとき子どもの好奇心を引き出す発問をする	.01	-.05	.83	.63
43 子どもたちが知る喜びを感じられる授業を行う	-.03	.28	.63	.70
27 子どもたちが主体的に学べるように、授業内容の工夫をする	.08	.14	.60	.58
18 子どもたちが「わかる」「できる」を実感できる授業を行う	.21	.08	.52	.56
14 子どもの自主性・主体性を促す指導を行う	.18	.04	.52	.47
11 多くの子どもが参加できるように、授業場面を設定する	.10	.16	.47	.47
1 形だけの指導にならないように、子どもが考え・反省できる指導を行う	.06	.21	.44	.43
42 子どもが話すときには、教師の価値観をいったん保留して、じっくり耳を傾ける	-.04	.31	.43	.44
Gronbachの α 係数	.90	.90	.91	
因子間係数	因子1	.74	.72	
	因子2	.74	.73	
	因子3	.72	.73	

考 察

本研究において、「教師として必要な基本的態度・姿勢」が第 1 因子として抽出された。このことは、管理職を含めた他の教師との協働的な関係を基盤とし、子ども一人一人に対して細やかなまなざしを向けることが教師の指導文化の根幹である可能性を示唆していると考えられる。